

Title	福澤先生と明治十四年の政變に関する一史料
Sub Title	
Author	尾佐竹, 猛(Osatake, Takeki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.3 (1934. 11) ,p.25(371)- 34(380)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19341100-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤先生と明治十四年の政變に關する一史料

尾 佐 竹 猛

山本達雄氏が、故矢野文雄氏追悼會の席上で述べられた一節に

私が明治十六年の春、三菱會社に入社致しましたが、間もなく同社重役莊田平五郎君に隨ひ、仙臺、盛岡、青森を経て北海道を巡回したことがありました。其頃莊田君は各地支店ある處にて、顧主のため宴會を開きしが、夜中旅館に歸りて寝につくに當り手鞠より一冊の書物を取り出して寝ながらこれを耽讀するを常とし、人のこれを知るを憚るものゝ如く、隨行者にして何人も何の書冊なるやを知る者なかつたのであります。函館を経て小樽に在る時、たましく支店長久保扶桑氏の主催にて同地の料亭に招かれ會食することになり、夕景旅館を出づる前、案内のため莊田君の室に入りたる時、一冊の書物床の間に横はりゐるゆゑ、何氣なくこれを見るに、矢野龍溪先生の新著、經國美談にてありし、發刊早々著者より莊田君に贈呈せられたるものであります。發行早々にて、未だ多く世に知られざるものであり、しかも敬慕する先生の著書なれば急に觀たくなり、間を得て之を讀まんと、内々之を

懷中し料亭に赴きました。夜更けて旅館に歸りたる後、莊田君は例の如く就寝の節、之を讀まんと搜せしも見當らず、その時初めて料亭に置忘れし事を思出して、ひたすらその粗忽を謝し恐縮を極めしがありました。温厚にして何事にも謹み深き莊田君も、この時許りは顏色を變へて怒り出し、どうも貴方は餘り酷いではありませんか、彼の本は親友矢野君から内々贈り來りたる大事の本にて、貴方も御存知の通り人目を憚りて、常に手鞄に收め置き、夜分人が寢靜まつた後、初めて讀む位注意して居るに、人にも告げず料亭に持ち行き、しかも置忘れて歸るなどとは餘り亂暴でないか。

また語を繼ぎて曰く、矢野君は改進黨大隈公の片腕ともいふべき最も重んぜらるゝ政治家である。今大隈公と三菱岩崎との間には離間中傷をなす者少なからず、就中古澤滋氏の如き、新聞や雑誌に於て激烈なる三菱攻撃をなしをる最中なれば、われくの行動は最も注意せねばならぬ、況や矢野君の如き政治家の著書は、餘程世間の耳目に觸れぬやう注意して讀まねばならぬ筈と手強く叱責せられたことがありました云々

といふのがある。莊田平五郎といへる財界の大立者が、恰も、共産黨の祕密出版物でも讀むが如く戦々恐々として、讀んで居つた『經國美談』といへば、今更ら説明する迄もなく、洛陽の紙價を貴からしめた政治小説、歴史小説で、苟も文字あるものは讀まざるはなく、當時の青年は、その一章一句を暗誦して居つた程有名なる作品である。

左様に有名な小説を読むに、人目を憚らねばならぬとは、今から考ふれば想像もつかぬことであるが、これは、その小説よりも、その著者たる矢野文雄が、政府筋の注意人物であつたからである。といつても矢野その人は、決して不穏人物でもなんでもなく、慶應義塾出身の大先輩であり、新進の政治家であり、教養ある日本紳士として典型的の英國流の紳士であつた。

恰も、此頃は、自由黨が、改進黨と三菱攻撃とに全力を注いで居るときである。即ち政黨と財閥との結托を攻撃して居るときであつた。しかも、この攻撃は、その前奏曲ともいふべき明治十四年政變の後繼運動である。

矢野は、この時は改進黨の參謀總長ともいふべき地位にあり、十四年のときは、政府攻撃の第一線に立つ指揮官ともいふべき武者振りであつたのである。

その十四年のときには、佐々木高行日記、八月二十九日の條に

さて伊藤（博文）の内話に、この頃大隈の内意は、方今の民權論へ同意いたし、只今の政府にては、とても見込無之との趣旨にて、極密局外の者と相結び候趣、矢野文雄へ命じ、九州地方へ巡回の砌、その趣旨を申述べさせたる由、肥後人より内通があつた。これは三菱會社及び福澤諭吉と相計りたる由、實に惡むべきこと。

とある最も聰明なるべき伊藤博文ですら、デマを信じて、最も惡むべきものと目せられた福澤先生とい

ふものが、この矢野の背後にあるといふことが、常に政府筋の目の光つたる所以である。

然らば、その十四年の政變はといへば、明治史上の重大なる事件であるにも拘はらず、近年に至る迄、その眞相が明瞭を缺き、甚しきは前後顛倒した誤謬さへ傳はつて眞事實と信せられて居つたのである。

これには、此事件の中心人物と目された大隈重信侯と、福澤先生との兩方面より研究せなくてはならぬが、これも學界の進歩は難有いもので、大隈家側からは、渡邊幾治郎氏の『文書より觀たる大隈重信侯』の一節に『明治十四年政變の眞相』が掲げられ、また『季刊明治文化研究』第二輯にも、同氏の『明治十四年政變に就いて』が載せられ、福澤家側よりは、先生傳第三卷第三十三編に『明治十四年政變』が出て福澤先生が、自らその顛末を書し筐底に藏せられてあつた明治辛巳紀事が、始めて公にせられ、これは『續福澤全集』第七卷にも掲げられてある、それから、また小泉塾長の『師、友、書籍』中の『福澤諭吉傳』及び高橋誠一郎氏の『福澤先生傳』にも、いづれも論究せられて、全貌が明白となつた。

これ等に依れば、あの常識を失したと思はれる程の馬鹿々々しき騒ぎをなした政變の基は、福澤先生に關する限りに於ては事實無根のデマであることは明瞭となつたのである。

結局は、薩長出身の參議が聯合して、大隈重信を排斥の辭柄として一場の喜劇を演じたことに歸するのであるが、あの騒ぎの最中には、薩長連と別に、この際に、薩長を押へねばならぬといふ宮廷内の一派の運動に付ては、從來餘り知られなかつたが、これも、當時一等侍補から元老院副議長となり、君徳培

養運動に専念しつゝあつた佐々木高行の史料が公にせられ、一部は『明治聖上と臣高行』に掲げられてあるから、その中より福澤先生に關する一節を援用せんに、明治十四年九月二十六日、元老院書記官金子堅太郎氏は、佐々木高行を訪ひて

福澤から藤田茂吉をして板垣に内談し、大隈も板垣と聯盟の策を樹てたさうな。又三菱會社から福澤に金八千圓を運動費として渡したので、小幡篤次郎が北海道遊説に赴くよし、且三菱は大阪の新聞買收のため一萬二千圓を出したとの事である。

と語つて居る。

それから、また

宮内少輔より内務大輔となつた土方久元は十月六日佐々木に

報知新聞社員に招かれて酒席に坐したる太田卓二の談に、同社は三菱から一萬圓を貰らひ、五千圓を豫備金とし、他は社員に割り與へたそだ。

と語つて居る、三菱の豊富なる財力は、直ちに運動費を聯想されるのである。

また十月一日、金子は佐々木に

福澤等は遠からず國會開設については、同主義者にて多數の議員を得んと周旋し、三菱會社より月給三百圓にて議員五名を賄ふ事となつたそだ。されど各縣にて得るは難き故、福澤は眞宗を押立て、

本願寺より各縣の門徒に諭告せしめるの策を執つた。三菱が斯くまで心配するのは、同會社は政府に二百萬圓の負債があり、且十年戰役に十一艘の官船を借りたるを、國會にて此の金額と官船の返納説起るべきを慮つて、福澤と圖り多數の議員を得んとする次第で、國を憂ふるためでなく、利己主義にて敢て斯の如き處置に及ぶと聞く。

と語つて居る、この本願寺云々の説の出所は、大隈重信が

當時我輩は主義宣傳の爲めに、本願寺を手先に使ひ、本願寺を中心とした朝野新聞に成島柳北が居て、其筆で全國六七十萬の門徒に宣傳をして居たから、此天下騒然の狀を呈するや、己れ火をつけたのは、大隈だ、大隈は太い奴だ、横着の野郎だと、表面具體的な材料は無い譯で、今にして思へば、芝居の筋は頗る喜劇に類する位だが、みんなでトウ／＼叛逆者にして了つた。云々
とあることから出た訛傳である。

十月二日には、北代正臣は佐々木を訪ふて

大隈、河野、岩崎、福澤、沼間等は結合して政府を乗り取つて、大隈、副島を大臣としその他の者は要路に立ち、急遽國會を開くとのよし、或は還幸後直に之が決行されんも計り難い、實に憂ふべき事だ。

と語つて居る。河野とは農商務卿である敏鎌のことであり、沼間は、東京横濱毎日新聞の社長とし、嚙

鳴社の牛耳を執る守一のことである。

こんどは利權より進んで獵官となつたのである十二日、參議兼外務卿たる井上馨は、佐々木に副島は、過日三條へ建白し、速に國會を開設ありたく、今日の内閣も改造ありたい、私の人選では、福澤を外務卿に、田口卯吉を大藏卿に、沼間守一を司法卿に、福地源一郎を何卿にと、其他も夫々役割して差出したさうだ。或は云ふ別に大東義徹を以て御巡幸先へ右の趣旨を建白し、參議一同の免官をも乞ふたそうだ。

と談じたから、佐々木は

宮内卿徳大寺に問ひたるに、成程秋田にて大東某が副島よりの封書を、左大臣宮に呈したのを見受けたが、何の趣旨かは判らぬ。宮から奏聞されたかも判らぬと答へた。

即ち、有栖川熾仁親王の御手許へ此説は達したやうである。

それからまた、『明治辛巳紀事』には

本月(+)十三四日の頃、中上川が伊藤の宅へ参りたるとき、井上も丁度其席に居合はせて語次、中上川へ向ひ、足下の叔父様が太政大臣に爲りても云々と語りたり。云々

とある。中上川彦次郎は當時外務權大書記官であつた。福澤太政大臣、または福澤外務卿などは頗る愉快である。

十一月二十八日、内閣にて井上は佐々木に
財政は甚だ困難なるに、大隈は頻りに商業家に官金の貸下げをなした。僕が大藏大輔たる時は、一人
にも貸下げはせなかつた。昨年も福澤諭吉から學校へ四十萬圓拜借したしと申立てたので、大隈は諾
したが、伊藤は異議を述べた。福澤が僕を訪ふて周旋し呉れといふ故、僕は不同意を唱へたるに、福
澤は「五代や岩崎へ貸下げ、學校へ貸下げるのに、不同意とは解せぬ」と笑ふ。僕はこれに答へて「君
は學者先生と心得て、今日まで交際したが、五代や岩崎などの商人と同等の身分なれば、向來其心得
で交際せん、然らば願書を出されよ、僕は同意せぬ。云々

とある。これは明治十一年から明治十二年にかけ、塾の經營困難の爲め、福澤先生から借用金を願ひ出
でたるときのことと、詳細は先生傳第二卷、第二十九編に掲げてある、このことさへも、十四年の政變
と結付けて考へられて居るので萬事、色目鏡で見ると斯ふでもあつたらう。一犬虛を吠へとでもいふべ
きか、それから、それへと、デマは飛んだことは、今日から見れば、寧ろ滑稽に見へるが、當時如何に、
騒いだかは想像されるのである。

佐々木史料には、その他幾多、面白い談柄はあるが、これは省略するが、その中に、左の一節だけは注
目に値する。

十月三十日夜、岩崎彌太郎は、佐々木と土方久元とに次の如く語つて居る。

この頃自分は大に嫌疑を受けて居るも、決して國事に關係して奸策を施したのではない。然るに政府にては疑念を以て探索のため、忍び巡査を近所に遣り、僕の出入並に他人の出入に目を屬し、甚だ以て困却する。畢竟五代友厚などの讒言で、三菱會社から金を出して百方攻撃させ、大隈の地位を保たせるといふ事から、此開拓使事件につき、三菱會社から金を出して百方攻撃させ、大隈の地位を保たせるといふ事から、此の機會に乗じて三菱を押潰さんとする、薩人は信用して三菱を謀叛人の如く思ふのである。

と、佐々木と土方とは

如何にも其嫌疑がある、自分共も疑ふて居る。成程國事に關係はなきも商業上の争ひから、要路の人々を惡様に唱へるやう、金力を以てした嫌はある。

と云へば、岩崎は

決してない、彼の官有物拂下は逆も目的なし、彼の徒をして其の意を達せしめば、却つて大敗を取ること目前にあり。されば商業上より見ても彼の徒を拒む事はない。其の敗を取ること却つて三菱の商業上には便利である、又大隈と密着の關係はない。

と答へた。政府が巨額の國費を支出して、十數年を経て成績の舉らざる開拓使の事業を拂下げて、民間で遣らうとしても算盤の採れぬことは解り切つて居る、いつそ、これを拂下げさせて商敵たる五代友厚一派に失敗させること、三菱の附け目であるのに、その拂下げに反対する爲め運動費を三菱が出す筈が

ないとの説は尤である。

この根本がハツキリすれば、従つて、三菱が運動費を出して、福澤先生を使嗾し、福澤先生が、また大隈を煽動するといふことは、あり得ない。つまり、明治十四年の政變の基礎は、多言を俟つ迄もなく全くのデマであることが明瞭となるのである。

故に、その後に自由黨の改進黨攻撃、三菱攻撃のときは、三菱と大隈との結託を攻撃するに止まり、この時は福澤先生は脱けて居る、若し、十四年のときに、三菱——福澤——大隈のブロックがあつたとするならば、この時にも、此三頭目攻撃が主要であらなくてはならぬ。十四年のときの政府攻撃の鬪士も改進黨の幹部も、いづれも、義塾出身の有力者であることに於て、變りはないのであるから、福澤先生煽動説を喧傳するには、兩者共都合が好いのであるが、その然らざるは、十四年のときのデマであつたことに、世の中が氣がついたからである。

故に、能くの邪猜、惡意の眼を以て、十四年の政變を觀ても、三菱と大隈との關係のデマは、何等か色濃いことありと假定しても、福澤先生は全然冤罪であることは、極めて明白である。